

- 2014 ELLE シネマ大賞 ノミネート
- 2014 カヌヌ国際映画祭 正式出品作品
- 2014 ビエンヌフランス映画祭 ヤングジュリー賞
- 2014 ディアーヌ&リュシアン・バリエール 財団賞
- 2015 セザール賞有望男優賞ノミネート アハメッド・ドゥラメ
- 2015 サンタバーバラ国際映画祭 観客賞
- 2015 トロントユダヤ映画祭 最優秀作品賞(女性監督部門)
- 2015 セントルイス国際映画祭 最優秀作品賞
- 2015 コルコア フランス映画祭 特別観客賞
- 2015 ニュルンベルク国際人権映画祭 Open Eyes Jury Awardノミネート
- 2016 ボストン・ユダヤ映画祭 観客賞
- 2016 ワシントン・ユダヤ映画祭 観客賞・最優秀作品賞

一人の教師のアウシュビッツに関する「ある授業」が、
落ちこぼれたたちの人生を変える――。



8/6 ±
ロードショー
文部科学省選定 一般劇映画
(少年・青年・成人・家庭向き)

奇跡の教室

受け継ぐ者たちへ

Once in A Lifetime

scénario par Marie-Castille Marthon-Schaar et Pierre Kubel scénario Ahmed Ürmü Marie-Castille Marthon-Schaar directeur de la photographie Myriam Vincent A.F.C.
montage Benoît Guizon assistance mise en scène Zoé Carroca scripte Justine Herment casting Marie-France Wildé Christiane Estler costumes Isabelle Mufflon décor Anne-Charlotte Vinant
musique originale Ludovic Kinsoul aux Dons de la Vie Elisabeth Levert Elisabeth Pasquetti Christophe Vingtrière producteurs exécutifs Pascal Rellin une coproduction Lema Natcha Films Vendred'Film YFS Droits Audiovisuels USC France 7 Cinéma Orange Studio
avec la participation de France Télévisions OCS avec le soutien de La Région de la France F Agence nationale pour la cohésion sociale et l'égalité des territoires F Acad Commission Images de la diversité CNC Fonds Images de la diversité
La Fondation pour le Mémoire de la Shoah La Fondation Diane et Lucien Rivière La PROCREP et C' ANACIS Association sans France USC

監督: マリー=カステイユ=マンシオン=シャール 脚本: アハメッド=ドゥラメ, マリー=カステイユ=マンシオン=シャール 出演: アリアヌス=アスカリド, アハメッド=ドゥラメ, ノエミ=メルラン
提供: シンカ, NHKエンタープライズ 配給: シンカ SYNCA 宣伝: ブリッジヘッド, プレイントラスト 後援: ユニフランス 在日フランス大使館 / アンスティチュ=フランス=日本

kisekinokyoshitsu.jp

日本、世界中が泣いた! ています!!!

1人の女性教師の導きで、多民族の落ちこぼれクラスが、差別にまみれたアウシュビッツというテーマに正対する。社会や大人に見放された子どもたちが、教師の信頼を得て劇的に変化していくさまは圧巻であり魂を揺さぶられる。躍動する教育の真髄がここにある。

尾木直樹(尾木ママ)さん
(教育評論家、法政大学教職課程センター長・教授)

これが生徒たちなのか、そして教師なのか。生徒たちの表情がキラキラ煌めいてきて、それが奇跡の片鱗だとわかり、それを教師が1つに導いて奇跡を起こそうとしていることに気づいた。そのときには僕のハートは涙で裂けていた。

志茂田景樹さん(作家・よい子に読み聞かせ隊 隊長)

夜間定時制高校で、生徒たちと共に生きた日々を思い出しました。教育、すばらしい営みです。教師と生徒の心が一つになったとき、思いもかけないような輝きが産まれます。子どもたち、君の学校でアヌ先生を探してごらん。きっと見つかります。

水谷修さん(夜回り先生)

落ちこぼれの生徒にアウシュビッツを教えるこの映画を、全世界の人達がみて戦争の悲惨を悟るべきです。

海老名香葉子さん(文筆業)

パリ郊外の高校の困難な現実と教育の希望がある。サクセスストーリーだが入り組んだ物語。「すべての絵には描かれた意図がある」。中世の絵を説明するゲゲン先生の言葉を生徒たちは応用する。私たちもこの映画の意図は何かと問うべきだろう。

伊達聖伸さん(上智大学外国語学部フランス語学科 准教授)

人と人の相互作用のスコさを実感した。落ちこぼれの生徒たちが悲惨な歴史と正面から向き合うことで、自らの生きる意義を見出ししていく。一人の教師が、生徒を変えたのである。そして、その生徒たちによって教師もまた成長していく、それをこの映画は私たちに教えてくれるはずだ。若者だけでなく、すべての教師にぜひとも見てほしいと思う。

河合敦さん(多摩大学客員教授、歴史研究者)

「思春期」その嵐のような時期にどんな大人に出会い導かれるかで人生は決まる。肌の色、思想、宗教の違いが大きい国の、しかも思春期。本気の情熱でそのエネルギーを人間力に導く教師アヌ・ゲゲンの美しい魂に慟哭が止まらない!

小林照子さん(メイクアップ・アーティスト)

いやいや、アヌ先生のちいちゃな身体はどこからこのとてつもない情熱が生まれるのだろうか。ボンゴツの生徒たちに対する愛情、熱意の条件反射!!「退屈な授業はしないつもり」この呪文にかかった あなたたち。やればできるじゃない!! やったじゃない!! みんなの成長していくサマがすこぶる気持ちいい♡

萬田久子さん(女優)

教える難しさ、学ぶ難しさ、教える嬉しさ、学ぶ楽しさ、そして自分で考える大切さ、それを、今一度、教えて貰えました。

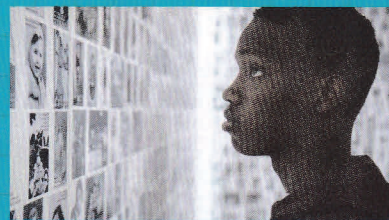
小堺一機さん

アウシュビッツ強制収容所のことは高校時代の68年に見たアメリカ映画で初めて知ったが、こんなに一所懸命に世界史を教えてくれる先生は、当時、僕の学校にはいなかった。今の日本にこんなに過去と未来に厳しい先生は、いるだろうか。

井筒和幸さん(映画監督)

生きている歴史、いま私たちがいる現実の社会、それらを学ぶということ。教育の本来あるべき姿がぎゅっと詰まった映画でした。

佐々木俊尚さん(作家・ジャーナリスト)



学校は子供たちに知らせめ、考えさせ気づかせる場所。身体より心の成長はとてつゆりだから、子供の可能性を信じ見守ることが大人の役目。

山本浩末さん(ヘア&メイクアップアーティスト)

文化、民族、宗教の異なる人々の「共生」。その至難を背負わされたパリ郊外の高校が舞台。人種差別、格差と貧困、暴力。現代フランスの抱える諸問題が構造化された日常の重みに、押し潰されもがく生徒たちが、ホロコーストの地獄を生きた人々の記憶と向き合うことで、自己の尊厳と他者へのいたわりを取り戻していく。とすると諦めに飲み込まれてしまいそうな現在にあって、人のポジティブな可能性をもう一度信じてみたくなる。

高橋暁生さん(上智大学外国語学部准教授)

のストーリー

(順不同)